



●タカラジェンヌから“けんせつ小町”への転身

# 未知なるステージでも 輝くために

土木事業は快適で安全な未来を築く社会貢献

小西 恵子 ●山口建設株式会社  
楠見 晴重 ●学長

元タカラジェンヌの小西恵子さんは、阪神・淡路大震災からの復興に尽くす現場作業員の姿を目にし、女性だけの華やかなステージから、いまだ男性社会のイメージが強い建設・土木の世界に転じた。今回は地盤工学の専門家として、土木の研究と教育の現場に身を置いてきた楠見晴重学長が、“ドボジョ”として生きる道を切り開いてきた小西さんと、変化する時代の中で求められる女性の活用、教育、社会貢献等について話し合った。

1995年、阪神・淡路大震災で被災した「JR六甲道駅」周辺  
(写真提供：神戸市)



◆平凡な日々を変えたくて、タカラジェンヌに

**楠見** 小西さんは宝塚歌劇団に在籍されて、今は建設会社にお勤めというユニークな経歴をお持ちですが、そもそもタカラヅカを目指した理由を教えてくださいませんか？

**小西** 私が生まれ育った和歌山県の橋本市は田舎で、当時は小中高と地元の学校に行くのが当たり前。保育園から高校まで、ずっと同級生が変わらない。そんな中で、平凡な日々を過ごしながら自分の将来が見えた気がしました。「このままで、いいのかな？」という不安と疑問が中学生の私の中で強く生まれたのです。環境を変えるため高校受験を機に地元から出てみようと思いました。「どうせ環境を変えるなら、いっそ女子校がいいな」と思いながら母に相談したら、女子＝タカラヅカというイメージが母の脳裏をよぎったようで、「タカラヅカだったら、素敵でいいんじゃない？」と言われたのです。「じゃあ、タカラヅカに決めた」と軽い気持ちで、宝塚音楽学校の願書を取り寄せました。願書で初めて受験科目に「歌唱」と「舞踊」があることを知り、未経験者の私は崖っぷちに立たされた気分でしたが、地元から抜け出したい気持ちも原動力になり、どうせ目指すならハードルが高い方が面白いので、ダメもとでやってみようと思いました。

宝塚音楽学校の受験資格は中学卒業からだったので、中学卒業時、一度試しに受験しましたが、結果はもちろん不合格でした。それから地元の高校に通いながら、授業が終わったら電車に飛び乗り、宝塚の受験スクールに通いました。そこは全国からタカラヅカを目指す人達が集まる場所で、平凡に育った私にとって全く違う世界でした。共に同じ目標に向かって切磋琢磨することで、今まで自分になかった向上心や競争心が培われたと思います。多感な時期にそれを経験できたことは私にとって良い財産です。そして高校1年を終業した時に、奇跡的に合格することができました。倍率は20倍以上あったと聞いています。

**楠見** 歌劇団に入られてから、記憶に残る舞台はありますか？

**小西** 出演させてもらった舞台すべてが印象的です。タカラヅカ



タカラヅカ娘役時代の小西さん

は何でも成績順です。下級生のうちは成績が良くないと良い役ももらえない。私は出来が悪い方で、特にバレエやダンスは、幼い頃から特訓している人にはどうしても追いつけない。ダンスより歌ばかり練習していました。その結果、声楽の成績では一番を取れることもあり、東京公演で、下級生ながら純名里沙さんの歌の代役として本公演で歌わせていただいたこともありました。

◆震災復興の現場を目の当たりに。建設業界へ

**楠見** 華やかなタカラジェンヌが、どうして土木の世界に？

**小西** 劇団員として宝塚大劇場の近くで一人暮らしをしていた時に、阪神・淡路大震災が起こりました。震災があったその日は、劇団員みんな、訳も分からずパニック状態。新築の大劇場も、スプリンクラーが壊れて水が吹き出したり、もう本当にひどい状態でした。東京公演を控え稽古中でしたが事態収拾まで一旦待機になり、私も何も分からず心細いばかりでしたので、すみれ寮に身を寄せていました。

当時、テレビの報道では、自衛隊や救急隊の活躍がクローズアップされていましたが、実家が建設業を営んでいたこともあって、被災者のため懸命に復旧作業を行う作業員の方や重機が、私の目に飛び込んできました。

タカラヅカは、人々に夢を与える意義のある素敵な仕事ですが、建設業は、直接的に人の生活の基盤につながる仕事だと強く感じました。自分に何か出来ることはないか、人々の生活基盤を支える仕事に携わりたいと考え、土木の世界にチャレンジしてみようと思ったのです。

**楠見** それで、和歌山に戻りご実家の仕事を手伝わられたわけですね。芸術の世界から土木の世界へと転じるのは、すごい決心だと思います。

**小西** それだけ目にした震災の被害が酷かったということがあります。電車が脱線し、家が倒壊して悲惨な状況でした。普段見慣れている景色があっけなく変わり果て、同時に多くの人が悲惨な目に遭う。それを嘆くばかりではなく、迅速に復旧に取り組み人の役に立つ土木業界の姿勢は私にとって衝撃的でした。

**楠見** 確かに、小・中学生で震災を経験し、防災や減災に携わりたい、人の役に立ちたいと土木関係の学科を希望する学生は多かったですね。

◆資格の勉強を通じて、新しい世界になじむ

**楠見** 私は土木工学の研究と教育に長年関わってきました。今は少し変わってきましたが、土木は“無駄な公共事業”という見方をされていた時代もあって、どちらかというと悪いイメージが先行しています。小西さんのように、土木の世界に入って行こう、それも華やかなタカラヅカからの転身は、我々にとっては、非常にうれしいことです。しかし、いきなり土木の世界に入られて、戸惑うことはありませんでしたか？

**小西** 譜面を見ていたのが、図面が変わったわけですから、正直右も左も全く分かりませんでした。なんとか土木業界にとけ込めるよう近道を探さないといけないと考え、資格を一つずつ取得することにしました。資格のための勉強をするうちに、仕事が身近

■対談



大学の主な使命は、昔は教育と研究でした。今は、それに社会貢献が加わっています。地域の人達と一緒に地域の課題を解決することも大きな社会貢献です。

に感じられ、専門用語も分かるようになり、ようやく周りの人の会話について行けるようになりました。

**楠見** 具体的に、何の資格をこれまでに取られたのですか？

**小西** 土木といっても分野が多いので、何から取っていけば良いかわかりませんが、まずは1級土木施工管理技士から始め、その後必要な資格を年の一つずつ取得しています。今もまだまだ勉強中です。

**楠見** 1級土木施工管理技士は、大学で土木などの指定学科を卒業し、実務経験を3年以上積んで、受験資格を得るのが一般的ですね。

**小西** 15年実務を経験して受験資格を得てから受けました。

**楠見** 勉強は独学ですか？

**小西** 独学です。講座を受講しても講師の説明していることが理解できていないと結局はついていけないので、過去問題集を購入して、ひたすら理解できるまで自分なりに勉強しました。記憶力は良い方なので、公式など覚えなければいけないことは、とことん暗記しました。

**楠見** 相当の理解力がなければ、合格できません。知識がゼロの状態から10以上資格を取ることができる人は、そうそういないですね。今は現場にも出られているのですか？

**小西** 実務が多いですが、現場にも行きます。工程が進んで構造

物が出来上がってくるのを見ると、事務所でパソコンを叩いているよりはるかに楽しいです。

◆土木の世界でも、活躍する女性は増えている

**楠見** 土木の世界は男性社会のイメージが強い。しかし最近では、現場で活躍されている女性が徐々に増えています。本学の卒業生も頑張っています。現場の環境は整ってきているのでしょうか？

**小西** 以前は資格試験会場でも、女性は私だけということがありました。まだまだ少ないと思いますが、最近現場で働く女性が増えていると肌で感じます。

2、3年前から、“ドボジョ”や“けんせつ小町”といった愛称で、土木の世界で働く女性が注目されるようになってきました。建設業界は担い手不足が深刻化しており、女性に限らず、男性も若い方も足りていない。いくら時代が進んでも、土木は人で成り立つ業界です。業界全体がもっと女性に興味を持ってほしいと願っています。

いまだ建設業界に対する泥臭いイメージが根強く残っていて、女性からすると、多くの職業の中で最初から土木は選択肢にあがってこないのだと思います。土木への古いイメージを払拭していくことが課題と考えています。実際に現場を見てもらえば、スコップメインで泥を掻き集めるようなイメージとは違うことがよく分かると思います。

学生はいかがですか？土木を学ぶ女子学生は増えていますか？

**楠見** 本学には3つの理工系学部があります。大学全体では1年次生で女子学生の占める割合が2015年度は41%と、非常に高くなってきましたが、理工系学部では、やはりまだ女子が少ない。私たちとしてはもっと“リケジョ”が増えてほしい。

理工系学部の一つ、環境都市工学部には防災・環境・交通問題など都市システムを計画・設計し、管理・運営する人材を育てる都市システム工学科があります。この学科の1学年の定員は130人程度。そのうち、女子は15人程度です。その中から、文系就職など違う業界に進む学生が2、3人程度で、女子もほとんど建設会社などに就職します。大手建設会社も女性技術者の採用に積極的になっているので、今後、女子の割合はもっと増えるだろうと思います。

私の専門は地盤工学で、同じ建設関係でも、都市工学や環境工学より女子に人気がない研究室ですが、2015年度は女子の割合の方が多くなりました。研究室でよく開催する現場見学会でも、一人で入り込んで行く女子学生がいますね。

**小西** 頼もしい女の子ですね。そういうお話を伺うとうれしくなります。

▼工事現場に立ち会う小西さん



土木の仕事は現場だけではなく書類作成や工程管理、ミーティングなど多岐にわたる

◆大学と建設業界。それぞれが担う社会貢献

**楠見** 大学の主な使命は、昔は教育と研究でした。今は、それに社会貢献が加わっています。地域の人達と一緒に地域の課題を解決することも大きな社会貢献です。その一つとして、本学は2016年1月に和歌山県および田辺市と、地域活性化に関する連携協定を結んだところで。

また、大学の社会貢献においては、大学が持つ知的財産を、いかに社会に対して還元するかが問われます。今年、創立130周年を迎える本学では、記念事業の一つとして「イノベーション創生センター」を設立します。これまでも本学では企業との共同研究などさまざまな産学連携を行ってきましたが、「イノベーション創生センター」では、さらに一歩進めて、キャンパスの中に企業等の研究部門を誘致し、大学の研究者や学生と一緒にイノベーションを創出していこうとしています。

建設関係の仕事は、事業を通じて社会貢献を意識する場面があると思いますが、いかがですか？

**小西** 水道やガスなどライフラインやインフラの整備は、地域の方の暮らしを支える社会貢献であることを実感します。さらに私は“防災＝土木”だと考えています。

道路や橋梁を造り、整備することは普段の生活の利便性を高めますが、それだけでなく、いざれ起こるかもしれない南海トラフのような巨大地震にも耐え得るインフラを造ることや補強することで、防災や減災の役に立つことができる。それが一番の社会貢献なのではと思っています。

◆答えのない学びの形。“考動力”を育む

**楠見** その考え方は私も同感です。最後に、タカラヅカの受験に始まって、現在まで自分の道を挑戦的に切り開いてこられた小西さんから、若者にメッセージをお願いします。

**小西** 生意気なことを申し上げるようですが、タカラヅカに入った時に、私が合格することによって、残念ながら合格できずにごく悔しい思いをした人がたくさんいる。その人達の方も、頑張らないといけないという責任を感じました。関西大学へ合格された方も、自分が希望する会社に就職できた時も、選ばれた者の責任感を持つことは大切だと思います。

責任感を持って前に進むにつれ、より大きい壁にぶつかり、理不尽なことを経験するかもしれませんが、若い皆さんには臆することなく我慢強くぶつかってほしい。自分の殻を破ることにつながるはずです。

最近の若い方は、インターネット等の恵まれた環境で育っているからか、どうしてもすぐに答えを求めがちです。しかし、正解がある学問とは違い、社会には答えがないことがたくさんある。我慢強く、時間を掛けないと、自分の探す答えは見つからないということをまず分かってほしいと思います。

**楠見** 新入生を迎える時に私も、「高校までの勉強には答えがあり、正しい道を選べば必ず一つの正解にたどり着くと理解しているかもしれない。しかし、大学の学びには、実は答えがない。あるいは、答えがいくつもある場合がある。だから、学びの形を

責任感を持って前に進むにつれ、より大きい壁にぶつかり、理不尽なことを経験するかもしれませんが、若い皆さんには臆することなく我慢強くぶつかってほしい。



大きく変えてください」という話をします。

実際に1年次から、高校とは違うスタイルの少人数ゼミ形式の授業を増やしています。その中には「スタディスキルゼミ」といって、新入生を対象に、大学での学びに必要な、聞く・調べる・読解する・書く・発表する・議論するなどの基礎的スキルを学び、実践する授業もあります。

本学は、自らの頭で考え、自律的に行動する“考動力”に溢れた人材を育てることを目指しています。考動するとは、まさに答えのない問いに対して、自ら考え行動することです。正解が一つだけではないことを実社会の中で実感し、考動し続けてきた小西さんの言葉は若者に響くだろうと思います。

小西 恵子 (こにし けいこ)

1973年和歌山県生まれ。90年宝塚音楽学校入学。92年宝塚歌劇団入団。78期生。雪組配属。新人公演「風と共に去りぬ」でベル・ワットリング役を演じるなど、娘役として活躍。96年退団。同年山口建設株式会社(和歌山県橋本市)入社。

楠見 晴重 (くすみ はるしげ)

1953年大阪府生まれ。78年関西大学工学部土木工学科卒業。81年同大学大学院工学研究科博士課程後期課程中途退学。82年関西大学工学部助手。90～91年英国Imperial College留学。関西大学専任講師、助教授を経て、2002年教授。07年環境都市工学部教授となり、同年4月から学部長に。09年関西大学学長に就任。文部科学省大学設置・学校法人審議会特別委員。一般社団法人日本私立大学連盟副会長、公益財団法人大学基準協会理事、公益財団法人土木学会フェロー会員。主な共編著書に「地圏環境情報学 地下を診る最先端技術」「アジア古物語 京都一千年の水脈」など。